

地球を 読む

今上天皇は2019年(平成31年)4月30日に退位される。新天皇の即位は5月1日となった。生前譲位は江戸末期の光格天皇以来約200年ぶりである。20年の東京五輪は新天皇のもとで迎えることになる。平和の祭典は、日本の新たな象徴の姿を首都東京から世界に向けて発信する、こよなき機会ともなろう。



山内 昌之 明治大学特任教授

江戸入府430年

家康の江戸城は明治維新後、そのまま皇居となり、4世紀を経て首都の「緑地」として心のやすらぎを国民に与えている。家康は、江戸を中心に幕藩複合国家ともいべき一つの国家

家康が築いたTOKYO

は、家康のリーダーシップなしには出現しなかったのではない。創り上げ、「パクス・トクガワナ(徳川の平和)」によって、応仁の乱をはじめとする戦乱と無秩序を招いた中世の力オスに終止符を

打ち、民間社会の成熟と列島の均質化を進めたのも家康に他ならない。また、江戸周辺農民の年貢を低く抑え、家内制手工業を農村から醸成させ、近代の産業革命への対応を静かに準備した日本の近世

また、薩摩藩に捕らわれた琉球国王の尚寧が1610年に駿府城の家康を訪れた際、家康は広間上段で御対座して、一国の王として丁重に礼遇した。これは家康が東アジアの政治力学を正確に理解し、琉球を朝鮮と同じく明との接点と見なす戦略的発想から来たのだらう。尚王家を皇族とせず侯爵に貶した明治政府とは異なる総合力の証左である。

〈2面に続く〉

地球を 読む

1面の続き

山内昌之氏 1947年、札幌生まれ。東大名教授。政府の「天皇の公務の負担軽減等に関する有識者会議」メンバー。月刊誌「文芸春秋」に「將軍の世紀」を連載中。

明治新政府が首都を江戸改め東京にしたのは理由がある。江戸が治安の良さと公衆衛生の清潔さで他を圧していたこともある。

だが何よりも、大名屋敷の官公庁転用で無駄を省き、新たな行政司法機構や企業本社を創出して、参勤交代も含めた膨大な武家人口の需要で潤ってきた江戸の商人・職人と家族らに大量の失業者や廃業者を出さない、という百年の計を立てたからだ。明治維新150年に当たる2018年の陰に隠れがちな家康の業績を忘れてはならない。

「將軍の世紀」現代に教訓

んのことに通じるキツネと、大きなことを一つだけ知っているハリネズミの両面を持つということだ。

3歳で母と生別した後、6歳から18歳まで人質として辛酸を嘗めた人生経験の豊かさは、武将・政治家に必要な戦略的構想力と戦術的緻密さの糧ともなった。織田信長や豊臣秀吉に忍従したとき、彼はハリネズミ

の忍耐力と決断力は、「われ一人腹を切て、万民を助けくべし」という覚悟に象徴される。小牧長久手合戦後、秀吉に迫られた上洛を暗殺の陰謀だと案じる家臣に

注意した。為政者として、物の名や風俗習慣は土地で違つ有様を理解せよと、さりげなくたしなめたのだ。

世界の軍人政治家と比較すれば、カエサルのように『ガリア戦記』を書くほどの文筆家ではないが、ナポレオンばりに核心を突く警句を即妙に発する才には恵まれていた。

家康は、天皇の政務に関する言葉を知らないのかと、家康はリーダーとして「足ることを知って足る者は常に足る」という老子の言葉を身に付けていたのではないか。「天下の政は重箱を搗粉木にて洗ひ候がよろしき」とも家康は述べた。すりこぎでは四角の重箱の隅まで洗えないように、国政も些末なことに干渉せず大目に見るくらいがよいというのだ(『本阿弥行状記』)。

また家康は、「水も余りにきれいならば魚は住まな」といふ言葉もよく引き

「狸親」が白髪首と文楽「八陣守護城」で揶揄される家康のイメージ

必要な資質であろう。また家康は、和歌や能に耽らずとも政治家として必要な教養は身に付けていた。

大坂の陣の際、近くの村に片葉の声があると聞いて声を刈らせると、外孫の一人が此処の声は萩だと余計な注釈を加える。すると家康は「難波の声は伊勢の浜萩(世阿弥『声刈』)と

統治者の本分にあくまで忠実に学問に接したのだ。

家康はリーダーとして「足ることを知って足る者は常に足る」という老子の言葉を身に付けていたのではないか。「天下の政は重箱を搗粉木にて洗ひ候がよろしき」とも家康は述べた。すりこぎでは四角の重箱の隅まで洗えないように、国政も些末なことに干渉せず大目に見るくらいがよいというのだ(『本阿弥行状記』)。

また家康は、「水も余りにきれいならば魚は住まな」といふ言葉もよく引き

ている。人を使うにも長所を評価し欠点を捨て置いた家康ほど、多彩な人材登用にたけた政治家は歴史に類を見ない。

豪商や彫金師、猿楽師、下級武士、落魄した公家や名門武家はもとより、英国人ウィリアム・アダムズ(三浦按針)やオランダ人ヤン・ヨーステン(和名の耶揚子)は八重洲の語源)が側近だったのにも驚かされる。「すべて人の価値を分らないのは、まったく自分の智を知らないからだ。才能や知恵がある者を使いこなせないあまり、役に立たない者とのみ国政を議論すべきではない」(『東照宮御実紀』付録巻18)。

新天皇の即位と家康江戸入府430年という歴史の節目を前に、現代人が家康とその時代の経験に学ぶべき点は多い。

英文はあすのジャパン・ニュースに掲載する予定です